かえり道 さそい道

前住からの法座お誘い状　第10号

●夏に鳴け！

蟪蛄、春秋を知らず
この虫、あに朱陽の節を知らんや

曇鸞大師　『往生論註』

※蟪蛄とは夏蝉、千五百年前、鸞師は浄土教を疑う人の問いに蝉の喩えで答えます。

※「春秋を知らず」とは、「井戸の中の蛙」と同じで、自己の見識の狭さに気づかずに得意になっている人を哀れんだ言葉です。

※広い海を知らずに狭い井戸の中で威張る蛙、春や秋を知らずに終わる蝉、その哀れなこと。

※鸞師は、お浄土を疑う人の誤りを先ず諫めます。

※人間境涯しか考えない人は、春や秋を知らない蝉と同じ誤りを犯していますよ…と。

●汝自身を知れ～愚者の自覚

※さらに、「あに朱陽の節を知らんや」と、この喩えの本当の意味を明かされます。

※その蝉は、夏に生きながら今が夏だとも知らない愚かな虫ではありませんか…と。

※広さを知ってはじめて狭さがわかります。今が夏だとわかるのは春や秋を知ればこそです。蝉は他の季節も今の季節も二重に知りません。

※ところがその広さも、更なる広さを知ったら狭くなります。人間境涯の目盛りは動きます。人は正しい目盛りを持ちません。

※お浄土という確かな目盛りではじめて自身が愚者と知れたと鸞師は決然と答えます。

●そして…

※愚者の自覚を得て、蝉と鸞師は同じ境遇者となりました。

※夏に死ぬ蝉にどうして春や秋がわかろう。同じように人間境涯の知恵で、どうしてお浄土がわかろう。

※蝉が夏を命いっぱい鳴ききって終わるように、私もこの境涯を命いっぱいお念仏を申しきって生き終わろう。

※念仏を冷笑する賢者に論駁しつつ、自身は愚者に落居して念仏を喜ばれます。「**そして…、私はお浄土に生まれます**」と。

※そして…と詩人の谷川俊太郎も綴ります。

夏になれば
また　蝉が鳴く

花火が
記憶の中で　フリーズしている

遠い国は　おぼろだが
宇宙は鼻の先

なんという恩寵
人は　死ねる

そして　という
接続詞だけを　残して

※まさか、やっと、そして…、あなたはどんな接続詞を残しますか？。お参りください。

（平成30年　歓喜会法要　前住職）